

【一】 次の文章を読んで、以下の設問に答えよ。

① すべての道徳は、ひとが徳のある人間になるべきことを要求している。徳のある人間とは、徳のある行為をする者のことである。徳は何よりも働きに属している。有徳の人も、働かない場合、ただ可能的に徳があるといわれるのであって、現実的に徳があるとはいわれないのである。(アリストテレスが述べたように、徳は活動である。ひとが徳のある人間となるのも、徳のある行為をすることによってである。それでは、如何なる活動、如何なる行為が徳のあるものと考えられるであろうか。この問題は抽象的に答えられ得るものでなく、人間的行為の性質を分析することによって、明らかにさるべきものである。

② 人間はつねに環境のうちに生活している。かくて人間のすべての行為は技術的である。言い換えると、我々の行為は単に我々自身から出るものでなく、同時に環境から出るものである、単に能動的なものでなく、同時に受動的なものである、単に主観的なものでなく、同時に客観的なものである。そして主体と環境とを媒介するものが技術である。人間の行為がかようなものであるとすれば、徳は有能であること、技術的にタクエツしていることではなければならぬ。(徳のある大工というのは有能な大工、立派に家を建てることのできる大工であり、これに反してあるべきように家を建てることのできぬ大工は大工の徳に欠けているのである。徳をこのように考えることは、何か受取り難いように感ぜられるかも知れない。今日普通に、道徳は意志の問題と考えられ、徳というものも従って主観的に理解されている。しかるに(例えばギリシア人にとっては、徳はまさに有能性、働きの立派さを意味したのである。この見方はルネサンスの時代に再び現われた。徳は力であるということも同様の見方に属している。実際、人間の行為はつねに環境における活動であり、かようなものとして本質的に技術的であることを思うならば、徳を有能性と考えること、それを力と考へることさえも、理由があるといわねばならぬ。行為は単に意識の問題でなく、むしろ身体によって意識から脱け出

るところに行為がある。従って徳というものも単に意識に関係して考えらるべきものではないのである。(芸術を制作的活動から出立して考察し、その一般の原理は美でなく却って真理であったフィードレルは、芸術的に真であることは、意図の、意欲の問題でなく、才能の、能力の問題であると述べている。我々は道徳的真理について、同じように、道徳的に真であることは、単に意志の問題でなく、有能性の問題であるということが、できるであろう。

③ 尤も、行為はすべて技術的であるにしても、すべての技術的行為が道徳的行為と考えられるのではないであろう。固有な意味における技術は物の生産の技術であつて、かような技術的行為はそれ自身としては道徳的と見られないのが普通である。道徳的という場合、それは物にでなく人間に、客体にでなく主体に、関係している。技術的行為については徳が問題にされる場合においても、それは主体或いは人間に関係して問題にされるのである。ひとがその仕事において忠実であること、良心的であることは、道徳的であるといわれる。そのとき問題にされているのは、彼の仕事でなく、彼の人間である。しかしながら他方、如何なる人間の行為も物に関係している。我々自身或る意味では物であり、人と人との行為的連関は物を媒介とするのがつねである。人間の徳を彼の仕事における有能性から離れて考えることは抽象的であるといわねばならぬ。

④ それのみでなく、技術の意味を広く理解して、人間の行為はすべて技術的であると考えるとき、徳と有能性との密接な関係は一層明瞭になるであろう。従来技術といわれたのは主として経済的技術である。かように技術という直ちに物質的生産の技術を考えることは、近代における自然科学及びこれを基礎とする技術の、ヒヤクの発達、それが人間生活にもたらした。ケンチョな効果の影響のもとに生じたことである。しかし(ギリシアにおいて芸術と技術とが一つに考えられたように、一切の文化は技術的に形成されるものである。そして独立な主体と主体とは、客観的に表現された文化を通じて結合される。主体と主体とはすべて表現を通じて行為的に関係する。(人と人とが挨拶を交わすとき、その言葉はすでに技術的に作られたものである。挨拶は修辭学的であり、修辭学は言葉の技術である。そのとき、彼等がボウシをとるとすれば、そこにまたすでに一つの技術がある。一般に礼儀作法というものは技術に属している。技術的であることによつて人間の行為は表現的になる。礼儀作法は道徳に属すると考えられているように、すべての道徳

的行為は技術とつながっている。礼儀作法は一つの文化と見られるが、一切の文化は技術的に作られ、主体と主体との行為的連関を媒介するのである。経済はもとより、社会の諸組織、諸制度も技術的に作られる。自然に対する技術があるのみでなく、人間に対する技術がある。人間は自然的・社会的環境において、これに行為的に適応しつつ生活している。自然に対する適応とは相互に制約する。自然に対する適応の仕方が社会の組織や制度を規定し、逆にまた後者が前者を規定する。自然に対する技術と社会に対する技術とは相互に関連している。そして歴史的に見ると、近代社会における中心の問題は自然に対する技術であったが、それが産業革命となり、その後その影響から重大な社会問題が生ずるに至り、現代においては社会に対する技術が中心の問題になっているとすることができるであろう。

⑤しかし道徳は外的なものでなく、心の問題であるといわれるとすれば、そこに更に心の技術というものが考えられるであろう。心の徳も技術的に得られるのである。人間の心は理性的な部分と非理性的な部分とから成っているとすれば、理性が完全に働き得るためには非理性的な部分に対する理性の支配が完全に行われねばならぬであろう。この支配には技術が必要である。人間生活の目的は非理性的なものを殺してしまうことにあるのではなく、それと理性的なものを調和させて美しき。タマシイを作ることであると考えられるとすれば、技術は一層重要になってくる。心の技術は物の技術と違って心を対象とする技術であるにしても、それは単に心のみ関係するものではない。この技術もまた一定の仕方すなわちで環境に関係している。即ち物の技術においては、技術の本質であるところの主観と客観との媒介的統一は、物を変化し、物の形を変えることによつて、物において実現される、そこに出来てくるのは物である。心の技術においても環境が問題でないのではなく、ただその場合主観と客観との媒介的統一は、心を変化し、心の形を作ることによつて、主体の側において実現される。かくして「人間」が作られるとき、我々は環境の如何なる変化に対しても自己を平静に保ち、自己を維持することができるのである。その人間を作ることが修養といわれるものである。修養は修業として技術的に行われる。しかしながら心の技術は社会から逃避するための技術となつてはならぬ。身を修めることは社会において働くために要求されているのである。修業はむしろ社会的活動のうちにおいて行われるのである。我々は環境を

形成してゆくことよって真に自己を形成してゆくことができる。いわゆる修業も特定の仕方において主体と環境とを技術的に媒介して統一することであるにしても、心の技術はそれ自身に止まる限り個人的である、それは物の技術と結び付くことによつて、真に現実的に社会的意味を生じてくるのである。

(三木清『哲学入門』)

〔注〕 オフィードレル Konrad Adolf Fiedler (一八四一〜一八九五) ドイツの哲学者。

設問

- (一) 「人間のすべての行為は技術的である」(傍線部ア)とあるが、それはなぜか、説明せよ。
- (二) 「徳を有能性と考えること、それを力と考えること」(傍線部イ)とあるが、どういうことか、説明せよ。
- (三) 「技術的であることよつて人間の行為は表現的になる」(傍線部ウ)とあるが、どういうことか、説明せよ。
- (四) 『人間』が作られる」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、説明せよ。
- (五) 「真に現実的に社会的意味を生じてくる」(傍線部オ)とあるが、なぜそのように言えるのか、全体の論旨に即して一〇〇字以上一二〇字以内で述べよ。(句読点も一字として数える。なお、採点においては、表記についても考慮する。)

(六) 傍線部 a・b・c・d・e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a タクエツ
e タマシイ

b ヒヤク

c ケンチヨ

d ボウシ

【解答】

(収録なし)